2011年度　カンボジア・スタディツアー参加者報告

日本ユニセフ協会　学校事業部は、毎年、全国の学校のみなさんからのご支援をいただき、モンゴルとカンボジアを対象に指定募金事業を行っています。支援先の2ヶ国の子どもの状況や事業を先生方に視察していただき、学校や地域での学習や広報活動に役立てていただけるよう、毎年夏にスタディツアーを実施しています。2011年度のカンボジア・スタディツアーに参加された高校の先生の報告とスタディツアーでの学びを活用した授業実践をご紹介いたします。

日程	2011年7月24日（日）～7月31日（日）
日本ユニセフ協会の支援事業	カンボジアでは小学校に入学している学齢期の子どもの割合は9割強と非常に高い。しかし、進級率は停滞しており、落第率や退学率はほとんど改善されていない。その対策として、小学校入学前の準備として効果の高い幼稚園教育の普及に取り組むとともに、貧困の家庭環境の下で、健康や教育などの面で弱い立場にある子どもたちを守る事業を進めている。
視察内容	・地雷教育と不発弾処理現場の視察 ・コミューン評議会とのミーティング ・州立病院、保健センターの視察 ・家庭で行う幼稚園、コミュニティ幼稚園の視察 ・子どもにやさしい学校の視察

©日本ユニセフ協会
2011年度スタディツアー参加者

静岡県静岡市立高校　教諭　田中　正夫

スタディツアー参加の動機

高校教員として、20年以上勤務し、様々な校種の学校に赴任して、いつも生徒に物事を伝えることの難しさを感じてきました。生徒の多くは、若い力を何かに試してみたいと、チャレンジ精神を旺盛に示してきます。例えば、中国四川省の大地震、スマトラ島沖大津波災害、東日本大震災等大きな災害が起きた時、本校でも生徒会、部活動単位、生徒の有志が個々に募金活動を行いました。私が校内のボランティア係をしていた時、集められた募金の送り先、誰が集めたのかの名義等を巡って、生徒同士の意見の対立の場面に立ち会いました。生徒の一つずつの言い分は分かりましたが、何のために募金をして、その募金は何に使われて、どんな人々が関わっていくのかが分からず、目先の現象だけに捉われた説明で説得しようとしていた私の勉強不足に歯痒さを感じていました。そんな時に、たまたま開いたユニセフのホームページの内容に見入りました。私たちが募金したお金がどんなふうに集められ、どんな人々に委ねられて、現地の人々に届き、どんな使われ方をしていくのかを実際に見ること、体感することができれば、生徒に物事を伝えることの一つの方法になると思い、カンボジア・スタディツアーに応募しました。

スタディツアーの感想

視察初日、生温い空気のプノンペン国際空港に着きました。何と言っても驚きは、空港からホテルまでの40分の道のりでした。カンボジアの人々がバイク3人乗り、子連れ4人乗り走行。走行車線では先を争い3列、4列並走のバイクの群れが移動し、交差点ではどこから進入しようとも車、バイクの前輪が先に入った者勝ちの交通ルールのようでした。エネルギッシュなカンボジアのパワーを感じさせられました。

トゥースレン博物館（ポルポト時代の収容所）では、1万人の収容者のうち3人だけ生き残った方の一人、チュンメイ氏に会いました。自分が投獄された実際の赤レンガつくりの個室は半畳ぐらいの広さで、コンクリートの床に足かせの鎖で繋がれ、個室で音を立てると、「逃げようとしただろう」と言ってポルポト兵に撃たれると証言されました。博物館の中には拷問を受けた人たちの無数の顔写真や拷問道具、収容者の絵描きによる拷問風景画が展示されていました。展示物の最後に無数の頭蓋骨が山積みにされ、ポルポト時代のカンボジア国民の苦悩と嘆きが容易に想像させられました。この国で何が起こったのか本気で考えさせられました。

研修3日目、貴重な経験をしました。コミュニティ幼稚園の視察です。村の20名くらいの幼稚園児が就学していました。高校教員の私にとっては、園児のみなさんがとにかくかわいい存在でした。一つ屋根の下、村長、教育長、州の教育委員、村人たちに出迎えられました。村人に、「電話は普及していないようですが、外部への連絡はどうしているのか?」と質問をしたところ、「携帯電話が普及している。月5ドルのプリペイド式。」と答えてくれました。家の電気は車等のバッテリーで、必要なときだけ使用するそうです。電気の普及にかける経費より、携帯電話のアンテナ建設の方が優先度が高いようでした。農村部では、暗くなると寝る。暑いので、朝のうちに農作業をする。暑くなる昼は、休む。正に、晴耕雨読。自然に逆らわない生活のようでした。

© 田中 正夫
ツアー参加者を見つめる子どもたち

また、訪問した小学校では、短い時間でしたが、子どもたちとの交流があり、私たちを受け入れてくれた子どもたちの純真さに本当に感謝の気持ちでいっぱいでした。

今回、ユニセフの実際の活動を視察させて頂き、私自身がやっている部活動を通じたボランティア活動の継続の意義を学び取りました。小さな活動かもしれませんが、ユニセフの事業に参加の輪を広げていきたいと思いました。